



古事記と日本書紀の崇神記には、三輪山説話が載せられています。どちらも蛇に擬せられた大物主の神と人間の女性との神婚譚である点は同じだが、古事記に登場する活玉依姫（いくたまよりびめ）が神の子を授かるのに対して、書紀の倭迹迹日百襲姫（やまとととびももそひめ）は神の怒りに触れ死んでしまう。どうして、同じ説話の結末がこれほど違うのか、ここには古事記と書紀の違いの秘密が隠されているような気がするのですが……。

今年は古事記成立から1300年、小さな物語を書いてみましたがどうでしょう。登場する女王は倭迹迹日百襲姫、トヨは豊鋤入姫、沼名木は淳名城入姫、大王はもちろん、ミマキイリヒコ、崇神天皇です。

三輪の里大市に女王の墓が完成したのは、女王の死の翌年のことである。

磯城の都の外れに突如出現した、この巨大な墓は人々を驚かせた。それは昼は人が造り夜は神が造ったといわれた。人々はその墓を「箸墓」と呼んだ。

トヨはこの日、巫女の正装で大王の傍らに佇んで、墓の上から葬儀の列が近づくのを見つめていた。列の先頭には、青竹の先に白い布を長く垂らした幡（はた）が揚げられ、その後を松明をかざした男たちと哭女（なきめ）の女たちが続き、さらに女王ゆかりの品物を一つずつ捧げ持って、嘆き悲しむ侍女たちの列が、野辺の道をゆっくりと進んでくる。

（女王は三輪山の大神の妻だったという。女王は神の罰を受けて死んだという。神は今、女王の葬儀を見守っておられるのだろうか）

三輪山の神は女王の元に夜だけ通ってきた。或る日女王は言った。

「あなたは何時も夜にやって来て、朝日が射す前に帰ってしまう。どうか今日は朝までここに留まって、私にあなたのお姿を見せて下さい」

「それでは私はあなたの櫛箱に入っていよう。でも私の姿に驚いてはいけない」

女王は変に思ったが、朝になるのを待って櫛箱を覗いて大層驚いて大声で叫んだ。そこには衣紐ほどの小さな蛇が入っていたからだ。

「そなたは私に恥をかかせた。だからそなたは罰を受けなくてはならない」

神はそう言うと、空を飛んで三輪山に帰ってしまった。それを見た女王はその場にあった箸で自らの身体を突いて、死んでしまったのだという。

（三輪山の神は恐ろしい神だという。私も女王のように神の妻にならなくてはいけないのだろうか）

この日、新たに巫女女王となるトヨの儀式も行われるはずだった。トヨは突然の女王の死によって始まった自らの運命の変転を思って、身を震わせた。

これより前、トヨと妹の沼名木が、斎宮となって神に仕えるよう大王に言われたのは、国内に疫病が流行り、多くの民が死んだ年のことである。

「斎宮は尊いお役目、この国に起きている災いを鎮め、神を斎き祀るお役目でございます。それに斎宮は、尊いお血筋でなくてはならないのです」

神浅茅が原で行われた大王のト占の儀式に呼ばれた二人に、占い師の太占（ふとまに）が言った。確かに二人は大王の娘だったが、トヨの母は木の国、沼名木の母は尾張の豪族の娘で、彼女たちは大王家に従属の証として遣わされた女達である。それに、この時トヨは13歳、沼名木はまだ12歳の少女に過ぎなかった。

トヨは不安そうに俯いている沼名木の手を握りながら、膝の上の琴を掻き鳴らし、神歌を歌っている大王を見つめていた。大王はこの場に神を呼び降ろそうとしていた。その後、太占による長い呪文と祈りが続き、ト占が行われた。鹿の骨に炭火を押し当て、現れた亀裂を見て神の意志を知るのである。長い神儀の後、太占は大王に告げた。

「天つ神はトヨさまが笠縫邑で、また国つ神は沼名木さまが穴師邑でお祀りするようにと、今宵のト占に現れました」

トヨは夢を見ていた。そこは磐余の池のほとりで、陽光の注ぐ水辺には遠い国からやってきた水鳥が群れ遊んでいた。そこでトヨは一人の少女に出会った。

「あなたは誰なのですか」と、トヨはその悲しい眼差しをした少女に聞いた。

「私は、私の本当の名前を忘れてしまいました。だから、私は貴方達が私につけた名前と呼ばれています。活玉依姫という名前です」

それから活玉依姫は、トヨに一つの物語りを語った。

「私達はこの三輪山の麓で田を開き、村を作って穏やかに暮らしていました。その頃優しい父母と共に暮らしていた私のもとに、毎夜通ってくる一人の男子が現れたのです。私はその人に心引かれ何時しかその人の子を身籠ってしまいました。有る夜、私は糸巻きに巻いた麻糸の端に針を付けておき、その人の衣の裾にこっそりと付けておいたのです。朝になってその人が帰られた後を見みると、糸巻の麻糸は寝屋の板戸の鍵穴を通り、外に抜け出すと三輪山に至り、その神の社に辿りついたのです。それで私は神の御子を宿したことを知りました」

気が付くとトヨは自ら活玉依姫になり、夢の中で赤子を胸に抱いて山道を逃げ惑っていた。振り返ると、彼女の村が赤い炎に包まれているのが見えた。

「大地の果ての遠い邑が、西からやってきた部族の一団に襲われたことを風の便りに聞いたのは、その翌年の冬のことです。彼らは天つ神の軍団でこの国の人が見たこともない馬というものに乗し、見たこともない武器を手にしていました。。そしてその年の秋、村を囲む丘の斜面から彼らは現れたのです」

彼女は激しい痛みを咽喉元に感じた。一本の矢が彼女を貫いていた。苦しい息の下で彼女は、「ミマキイリヒコ大王、万歳」と叫びながら、駆け寄ってくる長身の兵士達の歓声を聞いていた。

三輪山麓の笠縫の邑に、神域であることを示す玉垣が築かれ、天つ神を祀る社が建てられると、トヨは斎宮の巫女として天つ神の鏡とともに移り住んだ。穴師の邑は此処からさらに北の山路の奥深い所にあり、沼名木はそこで国つ神を祀っているはずである。

しかし、国中に蔓延した疫病は治まるところかますます勢いを増していた。

或る日、トヨは沼名木の夢を見た。夢に現れた沼名木はやせ衰え、髪は抜け落ち、まるで別人のようになっていた。

「山の霊気が怖いのです。夜毎恐ろしい精霊たちが現れて私を眠らせないのです。彼らは大王に殺されたこの国の国つ神たちなのです。大王は私に彼らの魂を鎮めよと言われましたが、私の霊力では彼らを鎮めることなど出来ないのです」

数日後、トヨは沼名木が死んだことを知らされた。この時になって大王も漸く三輪山の神の恐ろしさに気付かざるを得なかった。大王は神の言葉を聞くために幾日もの間、神浅茅が原に出向いて、琴を弾き、神歌を歌い続けた。そしてついに神は女王に神懸りして、言われた。

「国が治まらないのは我が意である。わが子を捜し出し、我を斎き祀れ」

河内の美努の村から、太田田根子がトヨによって選び出されたのは暫く後のことである。三輪山の神の子と名乗るその逞しい男は、大王の問いにこう答えた。

「私は三輪山の神と、貴方に殺された活玉依姫の間に産まれた子供です。私は貴方を恨んでいる。しかし私は今、神に災いを鎮め、怒りを納めてくれるように祈ろう。何故なら疫病で死んでいるのは、沢山の私の同属の民人だからである」

こうして三輪山の神は、女王と太田田根子が祀ることになった。大王の都には平安が訪れ、三輪山の麓にはさまざまな土地から、沢山の人が集まった。

トヨは、彼女の寝屋を出て行こうとする男に声をかけた。

「貴方は誰ですか。貴方は何時も夜にやって来て、朝日が射す前に帰ってしまう。もしかしたら、貴方は女王の元に訪れたという三輪山の大神でしょうか」

女王の葬儀から一年後のことである。トヨはこの国の巫女女王として優れた霊能力で人々を導き、人々の尊崇を集めるようになっていた。

「私のことが知りたいのなら、明日の朝あなたの櫛箱を御覧なさい。あなたは私の真実の姿を見るでしょう」と、男はトヨの問いに静かに答えて立ち去った。

トヨは朝日が射すのを待ちかねて櫛箱を開けた。そこには一つの櫛が入っていた。その櫛はトヨが樺市の歌垣で出会った男から贈られたものだった。

一月前の新月の夜、トヨが娘達の歌垣の話を小耳に挟み、自分も行きたくなって侍女と一緒に夜を待ち兼ね、こっそり斎の宮を抜け出した時のことである。

水と草の匂いがした。新月の明かりで初瀬川の流れが見えた。そこで思いがけずトヨは一人の男に歌を歌いかけられた。そして夢のような一夜を過ごしたトヨは、別れ際に男から一つの櫛を贈られた。

「そうです。私は神でも蛇でもありません。あの夜、歌垣の夜に出会った男です。

櫛を贈るのは求愛の証し、そしてあなたは私の求愛を受け入れてくれた。でも私は驚きました。あなたが神を斎き祀る巫女だと知ったからです。でも私は貴方が忘れられなかった。だからこうして危険を承知で通ってきたのです」

朝日の中に現れた逞しい男を見てトヨは驚いた。彼は太田田根子だった。

「いいえ、太田田根子は私の従兄弟です。私の一族は同じような顔なのです」

トヨはその時気がついた。女王の元に夜毎訪れた男は太田田根子だったのではないかと。そして、大王がそれを知ったら女王を許すはずがないと。何故なら、女王は大王の妻でもあったのだから……。



「奈良ソムリエ検定」の問題は全て4卓で100問のうち70問正解で合格。今年は1月8日でした。

まあ4卓ですから、アテ物と思えば楽なんですけど、問題は「2つに絞られるんだけど、どっちなあ」というヤツ、そういうのを外すとガクッリ来るんです。今年はこれを随分外しました。例えば次のような問題です。

(問題) 慶応4年(1868)、大和国に置かれた行政組織はどれか。

ア、奈良府 イ、五條県 ウ、堺県 エ、大阪府

まず大阪府と堺県はない。この頃はまだ維新の会はないし、奈良まで橋下に牛耳られては堪らない。で、「奈良府」にしました。理由は簡単、廃藩置県は明治だから、五條県はない。ところが試験の終了間際に前の席の女性の回答がタマタマ見えてしまって、その女性の解答は「五條県」。やっぱり奈良府は聞いたことないし...、1人より2人の方が心強いし...、ということで替えたんですが、正解は、『慶応3年(1867)10月の「大政奉還」、さらに12月の「王政復古」の大本令のなかで新政府が成立、翌、慶応4年(1868)新政府は大和の鎮撫に乗り出した。同年1月、軍事参謀烏丸光徳が「大和鎮台」を奈良に設置、2月に「大和国鎮撫総督府」と改称、5月にそれを廃止して最初の「奈良県」を設置した。その後一時「奈良府」となり、また明治3年(1870)には奈良県の一部であった宇智・吉野郡と、河内国・紀伊国の一部からなる「五條県」が新設された』

(問題) 日頃、鼻が大きいことをからかわれていた男が、猿沢の池から龍が昇るという立て札を建てたところ、実際に龍が現れたという短編「龍」の作者は誰か。

ア、芥川龍之介 イ、志賀直哉 ウ、堀辰雄 エ、折口忍夫

普通、芥川ですよ。でも芥川は奈良にあんまり縁がないし、高畑の「志賀邸」のあたりが好きで、志賀にしてみました。でも、正解はもちろん芥川。

まあ、答えは外したけど小説を読みました。面白い。奈良検定は落ちてでもこれで、納得しましょうか。猿沢の池に龍が現れるのは3月3日、今年は龍年ですから、12年に一度の年、本当に現れるかもしれません。